

「教育者」型人格における修養と宗教信念

——物外・三好愛吉の場合——

松 本 皓 一

一 はじめに

物外・三好愛吉（一八七〇—一九一九）は明治末から大正中期にかけての教育界では、きわめて特色ある教育者として知られているが、今日では恐らくその名は、郷党の間か、あるいはその関係諸学校の校史に留められているぐらいかと思⁽¹⁾われる。

旧時代の価値観に生きた教育者ではあったが、その個性的なパーソナリティと、そこにおける宗教とくに仏教なかんずく禅による修養体験とが、生涯をかけた教育者としての彼の諸行動の特質と、どのように関わりあっているかを明らかにすることは、大変興味ある問題である。

本稿執筆に先き立って、「教育者型人格と仏教」と題する三好の事例研究の一部を、第一回日本仏教教育学会で発表した⁽²⁾が、それは「教育と宗教との関係について」という彼の小論を中心にした素描にとどまった⁽²⁾。今回はそれを含めての全

体的考察である。

三好愛吉の資料としては、伝記『物外三好愛吉先生』⁽³⁾一卷がある。没後十三年にして刊行された大冊な伝記であるが、編者の序文によると彼の手になる直接資料すべてが収録されている訳ではない。編集の都合上かなりの量の未収録資料があるという。本稿執筆に当っては、村上市、新発田市、仙台市等における関係事項について実地調査し、資料の補足蒐集につとめたが、『伝記』に未収録の資料にまでいたることはできなかつた。したがって此処では、主として前述の『伝記』（以下、伝記と略）に加えて、村上市教育委員会、村上市史編纂室、新発田高等学校図書館、東北大学図書館、同記念資料室その他に所蔵された資料によることをお断りしておく⁽⁴⁾。

二 生活史

生い立ち

三好愛吉は明治三年十二月二十三日越後村上藩の城下（現

第二高等学校長時代
「物外三好愛吉先生」より

北には門前川を合わせた三面川が西流して日本海に注いでいる。

三面川は古くから鮭の漁獲で知られているが、近郊では茶や野菜の生産が行なわれ、また木彫堆朱の特産地でもある。

海岸部は瀬波温泉に接し、鉄道開通以前は瀬波港から僅かに汽船重吉丸が新潟や酒田と連絡するだけであった。明治十一年当時の村上の全町数二十五の戸数は二四七五戸と言われ、⁽⁶⁾村上藩内藤家五万石の城下町としては、一応の内容と体裁を整えていた。

内藤家の遠祖は徳川家康の弟信成であり、下って享保五年戊信の代、駿州より村上へ移封されてきた。しかし戊辰の役(一八六八)においては藩論統一に失敗し、藩士二百余名が奥羽越列藩同盟の鶴岡藩に合流して抗戦したこともあって、薩長を中心とした維新後の新時流から取り残された感があった。

こうした不安と焦燥を身をもって感じたのは、秩禄から貨幣による消費経済の中へ突き放された中下層の士族たちである。

三好家は、愛吉の祖父半助の代に江戸藩邸詰めで七十石の家禄を受けていたとの説がある。⁽⁷⁾しかし村上藩士分限帳には、三好範助の名で八十石と記載されている。⁽⁸⁾いずれにしても村上藩では、百石未満の石取りは端知といわれ、それ以上

新潟県村上市本町裏新町)に、父孫次郎(のち義雄と改名当時二十五才)、母とよ(当時二十八才)の子に生まれた。当時、長兄には五才上の銀太郎がいた。四年遅れて妹藤(ふじ)子が生まれている。孫次郎は、同藩石高百石の近藤小平太の弟であり、近藤家より三好家へ入ったと思われる。この年には、筆者の比較事例研究における対象として興味ぶかい寸心・西田幾多郎、大拙・鈴木貞太郎、嶺雲・田岡佐代治が生まれ、翌年には晃水・山本良吉、樗牛・高山林次郎、独歩・国木田哲夫が生まれている。⁽⁵⁾

当時の村上本町は二之町、三之町、飯野町、新町、堀片町の五町から成り、武家屋敷地帯であった。この村上本町と村上町を併せ総称したのが旧藩の城下村上である。両町共に岩船郡内の沖積平地にあり、東に旧城跡の臥牛山(一三五米)、

の高禄藩士である給人と、扶持米の藩士である中小姓との間にはさまれた中間の下位にあり、幕末期の藩財政下では決して恵まれた経済状態ではなかった。

旧村上藩士族六二二人への交付禄券高は合計三十二万七五八〇円である。⁽⁹⁾ 金禄公債証書の発行開始は明治十一年であるが、それから五年後の十六年三月十六日新潟新聞は、「岩船郡村上二ノ町外四ヶ町の士族七三五戸のうちで、九分通りは何をなすべきか手段も尽き、窮困に迫る者甚だ多し。…中略…頼む鮭産会所は年が年中〇〇より被告に取られ、其の価の莫大なるに貧士族も誠に以て実に以て日々の活躍に当惑し、此の末如何に至さんと腕を組で青息突只^(不明)嘆き居る」と報じている。

右の記事の中にやや意味の不明な部分はあるが、三面川の鮭漁利権をめぐる紛糾が生じ、従来依存してきた「鮭産会所」の利益が、貧士族に頼みの綱となりがたくなったことを物語っている。この紛糾とは、新発田中学位校・村上支校の経費の相当部分を、三面川の鮭収益で負担することから発していた。⁽¹⁰⁾

こうして方向に迷った士族たちが最後の望みを賭けたのは、次代を託す子弟の教育である。当時の城下町に根強かった藩校（村上藩では克従館）を中心とした学問尊重の伝統に、更にこうした士族の切実な願望が重ねられたのである。

孫次郎を改名した三好の父義雄が、江戸に出て洋学を学んだ背景にもこうした事情がある。江戸での勉学を終えた義雄は、帰国後一時郷土の水原小学校で洋算を教えたが、やがて新潟医学校、それが廃校となるや金沢医学校で教鞭をとった。三好が父を評するには、彼はきわめて几帳面な性格であり、神仏を敬って質実な生活をしていたとある。⁽⁴¹⁾ 他家から三好家に入った身の責任を自覚し、一家再建の現実的問題として、子女教育のための蓄財に専心した。当時教師としての俸給十七円で家族を養いながら、金禄公債七百五十円の利子には手をつけず当時の金で五百円の預金を子供たちの学資として蓄積したことは、三好自身が語ったところである。⁽⁴²⁾

したがって義雄の子供たち三人が学齢期に達する頃には、一応の学資は準備されていたであろうが、それでも三好自身は、父の姉の嫁ぎ先（篠田家）より学資の一部が援助された。⁽¹³⁾ 稲葉君山（修、のち法務大臣）は、これを評して、三好家は旧藩時代は軽身であり十分な資力もなかったので「居士（註三好）を励磨した唯一の力は正しく貧困の二字に相違あるまい」といっている。⁽¹⁴⁾

こうした中で、三好は最高学府に学び、兄銀太郎、姉藤（ふじ）子は共に新潟師範学校に学んだ。

このことは単に三好家が好学の家庭であったということだけではなない。時運におくれまいと焦る士族共通意識の発現で

あった。一見それは個人意識的であるが、底流では教育立国の国家意志と重なっていた。

スマイルズの『西国立志編』（中村正直訳）が世に出たのは明治四年（一八七一）、福沢諭吉『学問のすすめ』（第一編）が刊行されたのが明治五年（一八七二）である。⁽¹⁵⁾これらに代表される自主独立・実学尊重の啓蒙主義思潮は、明治十年代半ば迄には、北越の城下町村上にもその余波が侵透していた。

三好は青年時代を回顧して、当時の士族のものは貧乏が多かったが、「皆どうも野心満々として学問に志す念止み難かった」とし、「家で勉学を許されぬ者は逃げてでも出京し修行したものだ」と語っている。また親たちも「家財などはどのようにしても学資をやったものだ」とも述べている。のみならず裕福な町人の中には「佐藤伊助氏の如き自ら進んで学資の援助を申出るものもあった」と言っている。そして「之が所謂村上風の頑固のところであって、之がよかった」と、その意義を積極的に肯定する。⁽¹⁶⁾これは三好自身が育成されてきた精神風土であり、彼はこの中で東都遊学の夢を実現し得たのである。

その修学の概要を述べておきたい。

三好は明治九年（七才）から十四年（十二才）まで、当時父親が校長であった北蒲原郡水原町の小学校に学んだ。つづいて創立間もない村上中学へ入学。卒業と同時に明治十八年

「教育者」型人格における修養と宗教信念（松本）

（十六才）に上京。東京英語学校、欧文正鶴学館に在籍。いずれも英数を主とした高等中学への予備門である。二十三年、第一高等中学予科、つづいて本科を経て、帝国大学文学部哲学科を二十八年（二十六才）に卒業した。一年後輩に高山樗牛、桑木巖翼らがいる。

この間の様子は、たとえば高等中学校時代につき「首席を占むるはいつも今の外国語学校長たる村上直次郎氏なりき。今の第二高等学校長たる三好愛吉氏も優等生なりき。」と同窓の大町桂月によって語られている。大町は更に優等生として、文学者鹽井雨江やのちに中国史研究者として名を成す若き日の狩野直喜をあげている。⁽¹⁷⁾

当時の高等中学校本科において、いわゆる「優等生」とは如何なるものであったろうか。また三好が、大町のあげた優等生と同列の意味での秀才であったろうか、疑問の生ずるところである。

首席を占めた村上は、のちに吉利支丹関係を中心とした日欧交渉史研究の碩学である。三好は、村上や狩野にみられるような緻密な考古的実証や論理の積み重ね、あるいは鹽井における芸術的直観の豊かさにおいての秀才というタイプではないように思われる。彼らに比して三好は余りに信念的・行動的であり、もし大町の言葉が当たっているとすれば、先に稲葉君山が言ったように、期待に応えるべく「貧」から発した

覇気と努力の成果だと言えよう。

大学卒業に際しては、中島博士(註、力造)へ『アリストートル倫理説論文及び知識論』を出す。井上博士(註、哲次郎)には『因明学論文』とあり、西洋哲学思想と仏教学ないし東洋思想を併修している。この両思想併修は、当時の哲学専攻学生が選択履修する一般的な傾向であったろうが、三好の場合、後者が彼の実践的信念と結びついたという点で重要である。とくにそれが、正規の学校以外の場で、若年のころから学校教育と平行して修められてきたことを注目したい。

在郷時代から三好は、水原小学校長であった父親が舎宅を活用して開いた家塾において、村上中学時代には郷党の儒者三宅快斎(一八四二—一九〇四)⁽¹⁸⁾への師事を通じ、上京後の大学時代は、旧村上藩儒者から文科大学教授になった島田重禮(一八三八?—一八九八)⁽¹⁹⁾より漢学や儒教の薫陶を受けた。

三好の精神的背景は、ここで培われたと見ても過言ではない。彼の関心は生涯を一貫して教育にあったが、その知的教養体系は、専攻の西洋哲学と儒・仏、とくに禅を併せた東洋思想との複合から成っている。しかもその基盤は、儒教が要素であることが彼の特徴である。この点は更に後述することにした。

三好の兄銀太郎は一時小学校教員を勤めた。文才に長じ鍼南と号した。しかし生活は奇行に富み、生涯独身を通して飲

酒放蕩し、多くの借財を残して三好を苦しめた。

早くに父を失い、この兄の面倒を見なければならなかった三好は、この面からも自己を律し、他己を律すること、つまり修養と教育の重要なことを痛感せざるを得なかったと思われる。

教育を志す

三好が直接具体的に教育への関心を明らかにしたのは何時ごろであろうか。

高等中学時代を共にした清野長太郎の言として、「既に其頃から将来は教育者として世に立とうと云う考えが如何にも判然としていたようだ」とある。⁽²⁰⁾その「判然さ」とは、のちに女子学習院長として教育者の道を歩んだ同窓の松浦寅三郎に比較しても、その針路決定の態度は更に「判然」としていたようだと言うのであるから、単なる印象に留まるものとは言えないであろう。⁽²¹⁾

また、のちに帝室博物館総長となった大島義脩は、次のように述べている。

「其の当時哲学科には主に学者型の人が入学して居たために、卒業後地方へ下ることを以て一の下落と考へる風があった。其の時代に夙くから実地教育の志望を抱き、卒業と同時に此の例を打破して、結局教育を以て終始して見せたのは実に三好君であった」とし、この意味で「大学を出て実務(註

教育)につく一つの実例を作った人」と評価していることは、在学中すでに教育を志していたという先の清野の言を裏書きするものである。大島は更に続けて兎に角、一応学者たらんと志しながら結果的に教育者となった者をして(自分もその一人であるがと前置きして)顔色なかしめる次第になったと補足している。⁽²²⁾

このようにみると、三好の教育者志望は高等中学校在学中に胚胎し、大学在学中には固まったと見られる。しかもその動機は、今日で言う「でも・しか」先生ではない。最初より明確に「目的」的なのである。これによってこそ彼が大学卒業と同時に、浄土真宗大学並びに真宗中学の教授として、京都へ直行したことが理解できる。また最晩年、宮内庁傅育官長で終るまで、一貫して教育にかけた生涯のエネルギーをも理解できるのである。

教育のどこが、三好をかくも惹きつけたのであろうか。

彼にとって教育とは、断片的な知識教育を超えた人間教育であった。専門学の教師であることより、人格を感化する教育者に魅力を感じていたのである。三好においては、この「感化する」という言葉はきわめて重要な意味をもつ。彼は、人間を感化するということは、教育においても宗教においても、根元的に同一の働きだと見ている。ここに三好が、教育者でありながらきわめて宗教的な人格といわれるユニー

クさがある、それは後に詳述したい。

ところで人を感化するとは、自らの価値規準への同化を人に求めることである。とすれば人に求める自らの価値規準は、自らにおいて絶えず正されていなければならない。その努力を怠るものは、人を感化する資格はないと言えよう。教育者として、人を感化する任を自負した三好の人格構造には、常に他者を教育する外への力と、絶えず自己を修養する内なる力が働いていた。

その外への働きかけの具体的発現は、郷里村上における人材育成への熱意である。

後進の育英

元来、城下町の常として村上には、旧藩以来、学問を尊重する文化気運が存続していた。

新潟新聞によると、明治十七年三月十一日村上中学校振興策、同四月十七日青年自由大懇親会、十八年一月三十日学術研究のために精文社創立、二十年二月五日村上小学校において第一回岩船郡有志教育会開催、同日村上英学校開校式、二十二年五月十一日村上同好会発足の趣意書、二十四年三月二十七日青年勸学会による学術講演、同六月十八日村上青年勸学会と成志会による連合学術講演会、同八月二十七日村上同志会による近藤虎五郎工学士の学術演説等々の記事が散見する。

加藤太一郎によると、明治前半期の村上における学習結社として、前述の精文社のほかに朋来社、共同社、興風社の名をあげているが、いずれも資料が現存せず詳細は不明と言⁽²³⁾う。これらを通してみると、散漫ではあるが、好学の気運が胎動していることを察知できよう。

三好が郷党の人材育成に積極的に参加したのは、こうした地元の胎動へ東都から呼應したものである。その一端を『岩船郡郷友会雑誌』に見ることができる。

明治二十六年四月十四日発兌の第一号誌に、三好はその発刊を祝って擬古文体の雅文の祝辞を載せている。同じ祝辞でも儒者島田重禮が寄せた漢文調とは全く対比的な、技巧がかった美文体である。硬質な発想や文体が多い三好にはおよそ似つかわしくないものであるが、在京通常会員五十二名を代表して文科大学在学中の三好が祝辞を寄せたのである。⁽²⁴⁾

同会は明治十二年村上出身の在京者十四名が九段坂上の革源に会し、「互ニ親睦ヲ厚クシ、結合ヲ堅クシテ、郷里ノ人智ヲ開発シ、留学生ヲ奨励セント」を目的として、月例の小会・村上郷友会を開くことから始まった。

以後拡大されて岩船郡下一円に及び、名称も規約も変更され、目的達成のための会館も設けられた。

当初の目的に明らかのように、在郷学生を中心とした先輩後輩の親睦と団結、郷里との連繋の強化にあったから、おの

ずとそこには旧士族の特権維持、旧藩公を中心に相互扶助の機能が働いていた。公費による育英制度が教育行政の課題とならなかつた当時として止むを得ないこととはいえ、旧藩主内藤家を中心とした封建的結合意識で運営されていた。

明治二十六年一月九日、上野桜雲台で開かれた懇親会には子爵内藤信任以下三十七名が出席、その末尾に三好愛吉の名が見えている。

彼は二十四年以来同会の幹事に選ばれ、機関誌『岩船郡郷友会雑誌』編集委員であったが、以後積極的な推進役を演ずるのである。

第三号の誌上では「村上私学校ハ廃スベカラズ」と論じている。当初は新発田中学の支校として発足した村上学校は変則中学であり、中学村上校とも称せられた。しかし中学校令公布によって廃校となり、その施設は私立本町校として継承されたが、明治二十一年村上私学校と改名、鮭産育養所に経営資金を仰いで存続してきた。しかし明治二十四年同所の紛争によって経営基盤が弱まると共に廃止論が擡頭し、三好がこれに反論したのである。

村上学校およびその後身である村上私学校は殆んど村上藩士族独力で経営してきた。更に三好自身にも村上学校は母校である。その存続すべき意義を、三好は経営者の合理主義の立場からではなく、郷里における人材育成に必須という教育

者の信念から反対したのである。

第四号では、二十七年一月四日の神田開花楼の新年祝賀会の祝辞に「今や世道廃れて五倫拳らず人心の浮薄亦た言語に絶す」と憂いつつ「然りと雖も翻って我村上藩を見よ、整然として慶栄長えに長し、侯伯三百而して上下の義夫れ斯の如きは稀なり。豈に誇負せざるなからんや」と記して、旧村上藩士族の秩序ある団結を誇っている。

第五号には「馬童生に答へ併せて直行性に寄す」と題した禁酒提言者・馬童生への反論をのせ、六号に「大黒天考」と題する民俗信仰についての未完小論文をのせている。

明治二十八年三月二十五日発行の第八号は、この年文科大を卒業し京都へ赴任する三好に対し、鈴木久賢による「前幹事三好君を惜しむ」の一文を雑録中に収めている。

それによると「…会員を増殖し一意会務を挙げて双肩に上せ、雑誌編誌編集の如きは校課を擲つて是鞅掌せられたり。会規一新せしより爾来着々其進歩を見るに至りしは会長初め各地方委員諸君の尽力に頼ると雖も、又全君の鋭意是に当れしに依らずんば非るなり」とある。儀礼的修飾はあるとしても、三好が『郷友会雑誌』を通して会の運営に積極参加、その実績をあげていたことが認められよう。

しかし彼が郷党の育英問題に最も具体的意見を開陳したのは、第九号以下である。

明治二十八年七月二十五日発行の第九号論説として、三好は「郷友館ノ設立ト留学生ノ貸費」問題を取りあげている。

岩船郡郷友館は明治十八年神田三崎町裏松邸内に設けられ、その後九段坂富士見町に移転し間もなく閉鎖されていたが、東都留学生の経済・智育・徳育のためには必要欠くべからざるものとし、金沢藩の久徴館、福山藩の誠之舎、諏訪藩の長善館、福岡藩の筑前寄宿舎等に比して遅れをとるべからずと主張したのである。

岩船郡郷友会規則第十三条に「会員ノ気風ヲ涵養シ身体ノ強壯ヲ計ランガ為メニ郷友館ヲ設立スルモノトス」とあり、「基金ノ充足スルヲ待ツテ之ヲ設立云々」とあるのを、三好が推進したものに外ならない。

翌二十九年三月十四日付の第十一号に、三好は岩付持熙、鳥居錦次郎、吉田金作との連名をもって「大いに岩船郡出身先輩の諸賢に檄募す」と勸募の一文を載せている。

「今や我郷友会の組織稍完備を告げ、其面目又昔日の比に非ず…略…敢えて大学出身の諸士及他の先覚者諸賢、幸に吾人の表情を容れて我会の壮挙を翼賛し、毎月金一円以上を義損して之を我会に保管せしめ、適當の方法を設けて学生に貸与し、以て有為の青年をして其の志を伸べしめんことを」とある。

こうした三好らの主張が効を奏したと思われるのが、明治

三十年二月、岩船郡内の有志により村上本町に設けられた岩船郡育英義会の発足である。帝国大学官立学校入学者より特（25）に選ばれた優秀な者に一人平均百二十円を貸与したと言う。これによって親睦・団結の相互扶助的な郷友会が、名実共に後進を誘掖育英する具体的機能をもつことになった。

しかし三好において、人材育成という対他的働きかけは、同時にきびしい自己内省の要求となる。

自己修養

今日の若い世代には、「修養」という言葉はほとんど死語に近いであろう。修養とはある特定の生活型を理想として、自律他律いずれにせよ、そこへ順応してゆくことであり、おのずと抑止・節制・忍耐・持続・努力など一見して非合理的な自己コントロールを伴なう。今日の欲望肯定・欲求充足の文化の中では、「修養」が敬遠されるのも当然である。

しかし三好においては、人を教えるものは先づ自らを律しなければならぬという考えがある。この信念は、三好と深い関わりをもち、その生き方においても共似性に富んだ教育者

・北条時敬（一八五九―一九二九）を想起させて興味ぶかい。北条は廓堂と号し教育者であると同時に、禅に実参した

ユニークな人物である。金沢在住のころから臨済宗国泰寺の雪門玄松に就き、また清見寺の真浄、天竜寺の滴水、円覚寺の洪川などの禅匠にも参じた。

その北条が「人ヲ化導セントスルモノハ先ヅ自ラ化導セザルベカラズ」と言い、自己修養の鉗槌を課した。（詳しくは拙稿「北条時敬における人間と禅」を参照）⁽²⁶⁾この時代には、まだ「修養」の語が生きていたのである。

北条は教育界においても禅の世界においても三好の先輩にあたるが、修養に対するこの共通意識が、先輩後輩の垣を超えて両者をより親しく結びつけたと思われる。

この北条の紹介によって、文科大学在籍中の三好が清見寺の坂上真浄（一八四二―一九一四）に出逢うことになる。

明治二十六年四月「北条時敬氏の紹介にて興津清見寺真浄老師に参禅す」というのがそれである。この時、三好は二十三才、真浄五十二才である。真浄は相国寺の越溪・独園に参じてのち明治二十年來妙心寺派清見寺（現清水市興津）にあって禅を鼓吹していた。その間に師範学校に学び、ひととき教育の場にも立った経験もある異色の禅匠であったが、かえってそうした特色が教育者北条時敬の意に叶い、教育者を志す三好への紹介ともなったかと推察される。

しかし三好が禅との出逢いを求めたのは、これが最初ではない。

前々年の明治二十四年七月十二日に「天徳院に森田禅師訪問、三度不遇」とある。⁽²⁷⁾これは所用のため金沢に赴き、当時金沢医学校で教えていた父を訪ねた折、金沢市上鶴間町にあ

る天徳院の森田悟由（一八三四—一九一五）に面会を求めたときのことである。

当時、永平寺貫首の多忙な地位にあった悟由禅師には、三たびの拝登でもその機会を得ることができなかった。しかしここには、三好が自らを化導するべく禅の師を求めていた熱意を見ることができよう。その後三好はさまざま禅匠と出逢うが、森田悟由と永平寺で相見するのは、明治三十八年になってからである。このことは後に述べたい。

ところで、このように修養としての禅に三好を馳りたてたものは何であつたらうか。およそ三つの要因が考えられる。

儒教的教養、居士禅の流行、家庭環境の三つである。

儒教的教養

若年時より三好の教養を培ってきたのは儒教である。とくに多くの影響を受けたのは前述したとおり三宅快斎であるが、快斎は佐藤一斎（一七七二—一八五九）晩年の弟子と言われる。一斎は朱子学を講じながらも学説は陽明学に拠っていた。知られるように陽明には、禅に著しく親和した時代があった。わが国の禅学研究者の中にも、禅と陽明学の関係を、その親近性において論じたものを見ることが出来る。

また三好に遅れること十年の差はあるが、同じく特色ある教育者型人格として知られる無適・橋田邦彦（一八八二—一九四五）では、陽明の『伝習録』と道元の『正法眼蔵』と

が、彼の「行観」つまり修行観の中で、はたらきとして統合され重要な意味をもっている。（詳しくは拙稿「無適橋田邦彦における行について」参照⁽²⁸⁾）。

更に広く儒教と禅との調和をこころみたものに『禅海一瀾』（一八七六）がある。この儒仏融合ゆえに著者今北洪川（一八一六—一八九二）は、その弟子鈴木大拙から「仏教者としてはシンクレティック」と評せられたが、大拙の師・北条時敬は洪川より最も禅修行上の感化を受けた人物である。洪川の読書録の中には『伝習録』の名が見えているが、北条にも又陽明学の素養があつたことは知られている。

これらをあわせて考えると、三宅快斎に代表される儒教的修養が、三好における禅の実践的受容への回路となり得たと推測することができよう。

居士禅の流行

この典型を鎌倉円覚寺の洪川（前出）からその嗣・釈宗演（一八五九—一九一九）に至る周辺に見ることが出来る。

『円覚寺史』によると、明治十四年二月の『忘路集會闡集名簿』に、山岡鉄舟、川尻宝岑以下二十二名の居士、女子参禅の禅子十八名の名が見えている。

前述の北条は、明治二十二年洪川のもとで竹嶋の居士号を許されたが、当時彼の周辺には同世代の参禅の居士、早川千吉郎（雪堂、のち三井重役・満鉄総裁）、川村善益（のち控訴

院長）、平沼騏一郎（機外、のち首相）、鈴木馬左也（真清のち住友総理事）、花田仲之助（松蔭、陸軍々人、日露戦役時満州義軍総統）などが螺集していた。

二十五年の雨安居の居士参禅者は六十余名、その中には安宅弥吉（のち実業家）らの名も見え、二十七年には第一高等中学生植村定造（僧名宗光のち日露の役にて戦没）、帝国大学生浜口雄幸、文学士夏目金之助（漱石）、文学博士元良勇次郎、杉村広太郎（無懷・楚人冠）など後年名士と目された人物の若き日の名を留めている。⁽³⁰⁾

前述したように「北条時敬の紹介にて興津清見寺真浄老師に参禅す」ということであれば、三好がこうした居士禅の動きと全く無関係であったとは考えられない。当時北条は金沢以来在京の期間を通じて、同世代の在家禅者たちの中心的存在であり、参禅の志がある者への助言や指導を惜しまなかった。

三好は晩年まで教育者として同じ道を行った北条を敬慕していた。共に官立学校の長としての榮譽をきわめながらも、権威に迎合することなく内面的剛毅を尚び、誠実にして質素な生活を旨としたことの相似性は、両者が禅による修養体験を共通したと重なって興味ぶかい。⁽³¹⁾

家庭的環境 北越という仏教信仰の盛んな風土にあって、明治初年という時代の三好家の家庭環境が先ず挙げられ

る。『伝記』の中で三好自身が認めているが、彼の父・義雄は毎朝神仏を拝し、祖母もまた伝統的仏事を重んずる篤信な家庭であった。彼の家の宗旨は、内藤家ゆかりの浄土宗光徳寺である。後年三好家の墓所は村上羽黒町宝光寺（曹洞宗）に接する高台に設けられたが、同墓地は共同墓地であり、法要儀礼等はすべて浄土宗で定むるところに従った。

三好の宗教信仰の祖型は、こうした伝統的信仰が根強い北越の精神風土の中で育くまれた。哲学専攻の知性をもちながら、大黒天のような民俗信仰への関心を併せもちえたのも、これがためであろう。⁽³²⁾ この意味で彼は伝統的宗教諸価値に寛容な、特に仏教信仰に篤い典型的な北越地方人のタイプであった。しかも、この伝統宗教に対する保守的態度が、キリスト教のもつコスモポリタニズムを受け入れがたくしていることも三好の特色である。ここには、当時十分に開化されていなかった地方社会の状況をも考慮に入れなければならないが、こうした伝統的宗教に対する親和性が、その伝統宗教の一つである禅への接近を可能ならしめた一因と言える。

このような視点から三好は、伝統的宗教信仰の風土から醸成されながら、若年時代からの儒教的教養を基盤として神儒仏混合の形態をとりつゝも、「修養」志向文化の人間関係のなかで、次第に禅への傾斜を強めるにいたったと思える。この辺を評して高島米峰（一八七五—一九四九）は「三好君の

思想の根底は正に儒教であり、信仰は確に仏教であった」と述べ、それがどの程度調和されていたかは測り知れないが「一度それが力となって外に向って発する時は頗る頑健なものであった」と言っている。⁽³³⁾

筆者はこの「頑健なものであった」というところに、禅をうかがい知ることができる思いがする。

禅者との出逢い

三好をめぐる巾広い人脈の中で、彼に影響を与えたと思われる禅者には、前述した森田悟由や日置黙仙（一八三七—一九二〇）、星見天海（一八三四—一九一三）などがあげられる。

前述したように天徳院では目的を達することができなかった三好が、永平寺に拝登、森田悟由に参することのできたのは、明治三十八年八月十四日のことである。

「初めて森田禅師と相見し朝夕の独参、茶話の外毎朝暁天の御垂誨により多大の化を蒙る。―初読眼蔵―眼蔵会の覆講聴聞―爾来悟由禅師の化を蒙ること多大なり。而して悟由禅師を通じて初めて高祖大師の化を蒙れり」とある。⁽³⁴⁾これは大正七年一月二十六日、曹洞宗大学における宗祖降誕会での講話の一節である。

三好は更に話を続けるが、その中で、教理や悟道は一般人には理解されがたい。しかしそれを実現している人格は何人をも動かす。「座禅と人格と一枚になった人、戒行と人格

と一枚になった人、人格の表裏を返して微塵ほども偽りの出て来ない人、…宗教界にかような人格が欲しい」とし、そういう人格を森田悟由に見てとったと言っている。

『随聞記』を読んで大師（註承陽大師）の行履と悟由禅師の言行と一掃なるを知り、禅師に帰依するの念一層深くなると同時に、大師に対する渴仰の念が湧起した」とも言っている。⁽³⁵⁾

「信」の内容は、第三者が外から揣摩憶測して価値判断すべきことではない。宗教の学としては、ただ当事者が「信」とする言語記述内容を、実証しうる範囲内で客観的な事実として認めるだけである。いま、ここで三好が問題としているのは教理や思想ではなく、仏祖道を実現している人格である。三好に森田悟由の人格に魅せられ、同時に道元の人格に魅せられたという記述がある限り、その内容はとも角、事実の存在は承認しなければならぬと思う。

その事実に対して、内容的な意味づけをするのは、当時永平寺貫首であった森田悟由が三好に与えた一篇の偈である。

心仏衆生最上禅 休_レ求棒喝有無辺

平常受用神通力 畢竟誰人豈授伝

「示三好愛吉学士」と題するこの偈には、平常綿密の行こそ最上禅とする曹洞の宗風が垂示されてある。⁽³⁶⁾「大師の行履

と悟由禅師の言行と一帰なるを知り云々」の三好の文字は、信念と道徳の一致を願う三好が、その理想の人格を森田悟由に見出したことと同時に、又森田の方も、一偈を寄せて三好の求道に強い期待を寄せていることにはかならない。曹洞宗第二中学林長として仙台在任中から三好と交際の深かった横尾賢宗（一八五一—一九二〇）は、この一篇の偈の存するところが、両者の間の綿密な消息を語っているとす。

日置黙仙も星見天海も共に洞門では名の知られた禅匠であるが、黙仙も天海も悟由と同じく金沢の旃崖奕堂（一八〇五—一八七九）に隨身していることを思うと、これら三者と三好との間に何らかの縁が働いていると感じても不思議ではない。

その他の禅者としては、臨済の天竜寺橋本峨山（一八五三—一九〇〇）、相国寺荻野独園（一八一九—一八九五）、円覚寺釈宗演（一八五九—一九一九）、南禅寺豊田毒湛（一八四〇—一九一七）、建仁寺竹田黙雷（一八五四—一九三〇）、妙心寺坂上真浄（前出）など各派管長級の人物と親交をもった。禅門以外では清沢満之（一八六三—一九〇三）、近角常観（一八七〇—一九四一）、釋雲照（一八二七—一九〇九）、山崎弁栄（一八五九—一九二〇）などがある。山崎弁栄は浄土門の人である。三好の生家の宗旨が浄土宗ということもあつたが、弁栄上人の真摯な人柄には非常な好意を寄せている。⁽³⁷⁾後

に述べるように彼の仏教信仰は、自力の修行に他力の信仰を併せることによって、安心の境地に到達した。ここには山崎以下の浄土門の人びとの影響を看過できない。

また教育者としての三好の地位が高まるにつれて官界や学界の名士との交流も深まった。

例えば、村上專精、島地大等、常盤大定、前田慧雲、高楠順次郎、高島米峰らの仏教学者、更にその周辺には沢柳政太郎、北条時敬、溝渕進馬らの教育界における多数の先輩同僚が居た。因みに三好が私淑した政治家は品川弥二郎（一八〇三—一九〇〇）、副島種臣（一八二八—一九〇五）である。歴史上の人物としては、吉田松陰（一八三〇—一八五九）に傾倒していた。彼らは共に幕末変革期の国事に奔走した人物ではあるが、品川と副島は明治政府に入ってのち国権主義的保守内務官僚として知られた。⁽³⁸⁾とくに品川が松方内閣の内相として、第二回総選挙に猛烈な選挙干渉を行なったのは有名である。

しかしその反面で、品川は駐独公使時代エミル・ハウスクネヒト (Hausknacht, F. 一八五三—一九二七) を帝国大学文科大学の教育学講師として日本に推挽したこともあつて、ヘルバルト主義教育学説を信奉していた一人でもある。また副島は宣教師フルベッキ (Verbeck, G.H.F. 一八一〇—一九七) に欧米事情を学んだこともあり、のち外務卿・特命全權大使等も歴任した外国通でもある。三好が私淑した人物像に、こ

うした両面性があるのは興味ぶかい。

あえて言うならば、三好にとって心服できる人物は、単に進歩的開明主義の文化人ではなかった。むしろ保守伝統的価値に立っても、己れをきびしく律し、その信念を人にも求め得るように「人格の表裏を返して微塵ほども偽りの出て来ない」強靱な自信ある人格者であることが必要であった。しかもなお決して固陋な閉鎖主義の主人公であってはならなかった。

品川や副島が果してそのような理想の人物であるとは言いがたいところであるが、少くとも三好にとっての主観的意味では、正しくそのようなものだったのである。

してみると、こうした世俗的人格との出逢いも、悟由や黙仙、真浄などと同じ線上の、同じ方向において志向されたのである。

三 人格の特質

言うまでもなくここで言う人格とは、心理学用語としての概念である。

三好の幼少時についての資料はきわめて乏しい。十七才四ヶ月当時は身長一、五七四（約五尺一寸）、体重十二貫八百四十匁である。当時としても大柄という方ではないが、がっしりとした体軀である。十八才のころの写真ではやや顴骨の張

った個性の強そうな顔であるが、幼少時は木村栄之輔が記すように、「豊富なる肉体の所有者なるも頑健にはあらざりき」とされている。また三好自身の記憶にも、小学生時代には「粗暴なる遊戯は好まざりき。喧嘩せしことは記憶せず」とある。戸外の活発な運動よりも、「毎夜祖母から昔噺を聞く」のが楽しみな大人しい幼年期であつたらしい。⁽⁴⁰⁾

しかし長ずるに及んでその風貌は、一見して人を畏敬せしめる不屈な意志と信念の面構えに変っている。鼻下の髭は若年時より蓄えていたが、切れ長の眼は澄んで鋭く、自・他にきびしい高邁不退転の精神は早くより老成の印象を人に与えたという。

本稿に借用した肖像写真は、旧制第二高等学校長時代のものであるが、すでに硬骨漢として知られた三好の面目が躍如としてゐる。

三好の人柄については、在郷の幼年期、各学校長としての活動期、皇室傳育官長時代に分けて考えるのが至当である。むしろこの三期を通して、三好の個性が大きく変つたわけではない。個性として一貫するものがありながら、しかもそれぞれの時期に特色があるということである。

しかし幼年時代は人格形成の過程という意味で流動的であり、また晩年の円熟期・傳育官長時代は皇室との関係で、その言行にはおのずとして制約や自重が働いたと考えられる。

そこでここでは、彼の五十年の生涯において、最も長く重要な意味をもつ教育者としての活動期を中心に述べたい。

その順序として、次に彼が歴任した諸学校をあげておこう。

明治二十八年（一八九五）二十六才、文科大学卒業と共に、京都真宗大学教授兼真宗中学教授（一八九五―一九七）、二十六才―二十八才

新潟県組合立新発田尋常中学校長（一八九七―一九九）二十八才―三十才

長野県立長野中学校長（一八九九―一九〇〇）三十才―三十一才

第二高等学校教授（一九〇〇―一九〇一）三十才―四十一才
全 校長（一九一―一九一四）四十二才―四十五才

秩父宮・高松宮傅育官長（一九一五―一九一六）四十六才―五十一才

このほかに第二高等学校在任中には、仙台医学専門学校、東北女子職業学校、曹洞宗第二中学林、東華高等女学校、第三臨時教員養成所、仙台高等工業学校等の講師を嘱託されている。

これら諸学校（とくに第二高等学校時代を中心に）の関係者（同僚・後輩・教え子）が、三好の人柄についてどのような語っているか、その片言を『伝記』中より拾って、彼の人の

格の概要を構成してみよう。

まづ、若干のエピソードから始めてみたい。

1 山内雄太郎（村上中学二回卒業生、のち姫路高等学校長）によると、かつて教え子の一人が帰郷に際して汽車賃を三好の所へ借用に行った。快よく貸してくれた金を持って駅へ行くと、そこへ三好がやって来て、先刻の金は急に必要となったので返してほしいと言う。止むなく帰郷を延期していると翌日三好がやって来て、都合が良かったからと言って再び先の金を融通してくれたと言う。

これは、たとえ自らは如何に困っていても、他人の窮地を黙視できない三好の性格の一端を示している。

2 これは余りに有名で、いささか美談めいてはいるが、旧長野県立長野中学校に、「神聖なピアノ」として伝えられる話がある。明治三十二年三十才で創立期の同校に校長として赴任した三好は、ピアノが欲しいという声に対して、教職員・生徒全員が冬季無暖房による燃料費の節約で購入すべきことを提案した。これを受けた全員が信州の厳寒に耐えて求めたのが「神聖なピアノ」であり、現在になおその伝承と共に受けつがれている。

こうしたストイックな、しかし価値合理的という視点からは、きわめて教育効果が高いと思われる行為が三好には顕著である。

3 三好が第二高等学校教頭時代の明治三十六年、同校校友会・尚志会十周年記念祭が行なわれた。⁽⁴¹⁾その折、三好は独断で一週間授業を休みにし、陸上大運動会をはじめ、提灯行列その他盛大な祝賀行事を行なった。

当時の校長中川元は上京中で不在、文部省もこれを重視したが、「雄大剛健」の気風を学生に望んでいた三好は、断乎としてその信念を翻さなかったと云う。

「雄大剛健」は第二高等学校の校風とよく言われた。東北の地にふさわしい気風ではあるが、その校風は必ずしも特定の時期に特定の人間によって提唱されたものではないとも言われている。⁽⁴²⁾しかし『第二高等学校校史』所収の「座談会（その二）」によると、「雄大剛健」が二高のモットーになったのは、三好愛吉校長の時代ということ出席者大方の同意が得られている。⁽⁴³⁾

三好には、こうした不羈磊落、自由闊達な行動傾向が多い。しかし右にあげた各エピソードは、いずれも三好の行動の特質を示す一例にすぎない。同様な例は数多く、これらに対する人びとの受けとめ方は多様であり、評価は毀誉褒貶さまざまである。

例えば、真宗大学や新発田・長野の両中学を短期間で辞せざるに得なかったのも、思想は豪毅果断に富んだが、他方で周囲事情との円満な調整がとれなくなった主角の強さのゆえ

と言われている。平凡常識の眼から見ると、常規を逸したと取られる言動もあり、「時々衝突もし論争もし、或いは豪傑ぶるとか気取るとか非難された」こともあった。⁽⁴⁴⁾その評価は肯定・否定のいずれにしても、それらを集約すると、三好の行動傾向の特質は大別して次の三つにまとめられる。

1 活動的・実行型・鍛練主義・全力徹底などで表現される行動特質の強さと一貫性

2 磊落豪放、明快率直、信念的などで表現される態度特質の強さ

3 節制、克己、超俗恭敬などの精神内容で表現される意志的・情緒的特質の顕著性

この三つは互いに関わり合いながら三好の対社会・人間関係・自己自身の問題において、個性的な行動となっている。

1・2は同じ「積極的方向」として関わり、3は1・2に対してむしろネガティブな関係で働きかけているように見える。しかし相矛盾するような1・2と3が、教育者・三好愛吉の本領なのである。

1・2が競合し相乗したところに、三好の教育観の基調である開発主義と、これに関連して好んで用いた全力主義・活発主義・鍛練主義・鉄本位主義等の人生観がある。

しかしまた反面、こうした積極主義が突出すれば、周囲と

衝突し磨擦を生じることは自らも十分に承知していた。

三好が同時に標榜していた「艶消し」と「野心」とは、正にこうした衝突や磨擦を未然に回避するための彼独自の知慧とでも言うべきものであろう。「艶消し」とは、表面的な華美や徒らなる才気を自制した地味着実な生き方を理想とする彼の信念である。常盤大定は、これを評して「いやが上にも光彩を加へたいとあせる世の中に、我と自から之を消そうというのは、煥発なる才気が蔽わんとすれども、いつかその鋒芒を現わさずに已まぬのに気付いた為であろう」とし、老子の和光同塵になぞらえ、三好の東洋主義から発したものと見ている。

三好は「野心」を、あえて「のごころ」と読ませた。洗練された都会文化の鋭利だが脆弱な知性よりも、大地に密着した野武士のごとき自主自律・剛毅高邁の精神を理想としたからである。これは第一・第三の各高等学校の都会性に対し、東北仙台の地で青年教育の任に当った三好が地方高等学校の特色を主張したものと言えるが、同時に「艶消し主義」と同様、三好自身の内なるものを自制する掛け声でもあったと言える。

したがってこれも又、自制という面での積極主義の現われに外ならない。前述の1・2と3は、互に相剋しながら同一の両面に過ぎない。三好においてあるのは、積極的な自己開

発と積極的な自己規制があるのみである。かくて、三好は積極的徹底的な「実行と修養」の人と言える。

教育者として立った三好の人格には、若年時代にみられたひ弱な内向性は全くない。この変化を評して、三好を識る多くの人は、口々にそれは修養によるものだとしている。たとえば若林資蔵は端的に「三好は修養によってあの人格を作り上げたものだ」と言っており、こうした例証は他にも多い。⁽⁴⁶⁾この点において、三好に宗教がどのように関わっているだろうか。

四 修養としての宗教

三好の宗教が、いわゆるシンクレティズムであることは既に述べた。神・儒・仏ときにはキリスト教にも理解を示しているが、キリスト教は信の対象とまでには至らなかった。あくまで修養のための知的領域に留まっている。これに対し儒・仏の伝統的修養型宗教の教典は、その知的理解が同時に「信」または「行」という実践への契機につながっている。

この知と行との合一は、前述した人格構造の特質をもつ三好において、又それを目ざしての過程においても、最も受け入れやすいものであったからである。

行すべきことを知って行じなければ偽善となる。「人格の表裏を返しても微塵も偽りの出て来ない人」を求めていた三

好にとって、偽善は最も耐えられないところであった。

大学在学中に、三好が剃髪して雲水姿に徹し、東海道を修行して興津清見寺を訪れたこと、一夏を通して比叡山に籠り、天台四教儀を受講したこと、その折は必ず威儀を正して三帰戒を受けたこと、後年には校務多忙の身をわざわざ永平寺に運んで眼蔵会に参じたこと：中には一部奇矯な行為と見られたものもあったが、それらも含めて「知」を「行」によって体験的に究めつくさなければ止まない精神のあらわれである。彼にとって修養として仏教を知ることが、仏教を行ずることではなければならなかったのである。しかし現実の問題として、それは容易なことではない。殊に公私多端をきわめてくると「修養の行」に長期日参することは恐らく不可能となったであろう。

したがって三好は、知と行の乗離を、自らの問題として考えると共に、学生全体の問題として心配した。

明治三十九年『尚志会雑誌』第七十二号に、三好は「懷疑と偽善の弁」と題する論説をのせている。

要約すると、彼は無我の愛のごとき純粹無垢な善は理想であって、現実の人間には達成しがたいことを自認する。人生の半分は偽善にみちているとし、その上で偽善に二種あるとする。

すなわち一つは、最初から悪を目的として善を装う偽善で

あり、もう一つは、善を目指しながら人格の力不足のゆえに、結果として偽善に陥ったものである。三好にとって悪むべきは前者であり、後者はむしろ憐れむべきものである。三好自身もこの憐れむべき偽善者たることを免れがたいと認めている。

しかし、この意味での偽善は、目的とする真善への志を失わなければ、やがてそこへ達する楷梯となり得る。それは正に「実践の問題だ」と言うのである。⁽⁴⁷⁾

このように三好は、自らを含め凡人にはなかなか真の善には到りがたいが、たとえ偽善と言われようと動機において真善であれば、不断の実践によって徐々にそれに近づくことができる、⁽⁴⁸⁾「偽善」も又肯定した。

『伝記』によると鈴木卓苗の回想記事として、かつて三好が第二高等学校舎監を兼ねていた時代、寮生の一部から言行不一致を指摘され、偽善者との汚名を受けたことがある。右の「論説」がこの非難に応えたものとは考えにくいけれども、一種弁明に似た内容にはなっている。

しかし筆者が注目したいのは、ここにおいてもなお「実践」が強調されていることである。その実践とは、真善への楷梯である「偽善の善」の実践である。三好は「偽善もよし。但し至善に帰着する偽善ならば」と、偽善を決して否定しない。それを努める以外、真善への道はないのだと現実肯

定の積極的実践を説く。真善を実現することのできがたい我々には、真善実現の期待のもとに「偽善の善」を即今の善として只管に行ぜよと言うことになるかと思われる。

憶測をたくましくすれば、ここには本証妙修を説いた禅の影響を見ることができるかもしれない。三好が曹洞の禅匠に参じたことは既に述べたが、残念なことに三好側に内容の仔細にわたる資料が乏しい。推測の域を出ないけれども、ただ幕直の向上主義の中に、たとえ偽善という一事に関してでもあれ人生における真・善の相対性を見きわめ、その上で更なる積極的実践論を展開していることに注目したい。この点は自力・他力をめぐる安心の問題と関連して後に述べよう。

宗教的活動

完全な善の実現が期しがたいことを自覚しながら、それへの不断努力を願う三好の態度は、一種の「誓願」の態度である。在家の身で、しかも官立学校の長として青年指導に多忙な三好に、十分な閑暇をえた自己修養の場があったとは思われない。

三好はその分の宗教的欲求を、仏典を中心とする自己修養と、さまざまな場における宗教的活動によって充たした。

ここにあって宗教的・活動と言ったのは、宗教と関わりをもちながら、あくまでも教育の一環として行ぜられた活動だからである。三好にとっては、宗教も教育も人間を感化すると

いう働きにおいては全く同根である。その点から言えば、三好自身は宗教活動をもって自任していたかもしれない。しかしここでは、宗教的として区別しておこう。

三好が最も活動したのは、その任期の長さ・活動範囲の広さから言って、二高在任中の在仙時代十七年間（一八九九・三〇才―一九一五・四十五才）である。この期間、二高以外にも諸学校へ出講したことは前述の通りであるが、その他さまざまな社会活動の中に、教育者三好の宗教的活動を見ることがができる。

『伝記』には、三好の後を受けて第六代の二高校長となつた武藤虎太が、三好の事業として、東華高等女学校（のち仙台第二高等女学校）の創立、仙台孔子会の設立、東北児童学校の創唱、あるいは仙台皇道会、全仏教婦人会、婦人法話会活動への協力、片平丁小学校の林間学校創始⁽⁴⁹⁾等を紹介している。

私立東華高等女学校は、三好が二高教頭の劇職にもかかわらず東華義会の資金援助を得て創立に漕ぎつけた学校である。のち校長職を他に譲ったが、当初は劇務中を自ら経営の責任者となった。これもまた女子中等教育に、修養の必要を急務と感じての実践である。

明治三十七年、三好が同校で行なった講話には、今後の日本女性が心がけるべきこととして、次の五項目が強調されて

いる。

一、心を広くすること

二、心を確かめること

三、勤労を厭わぬこと

四、規律を重んずること

五、師弟の情誼を重んずること

この五項目は必ずしも女性のみに期待されるべきものではない。男女の区別なく、むしろ人間として普遍的に求められるものであろう。

当時日露の国交はすでに断絶していた。そうした国際状況の中で、日英同盟により親近性を深めた英国婦人の大国的気風と比較した三好は、我国の女性も宜しく島国根性を脱し、⁽⁵⁰⁾ 広き心を養うべしと言ったのである。

しかし、この五つの項目を仔細に検討すると、実にそれ以上の意味をうかがうことができる。

「心を広くすること」の方法は、「生理的に為し得べし」と言い、肉体としての心を広げること、すなわち腹式呼吸^{II} 調息をもってその一法としている。ここには素朴ながら身心一体観が基調となっている。

「心を確かにする」とは、不動の平常心を培うということであり、信念の確立と言ってもよい。これこそ三好の言う修養の眼目である。が、同時に宗教が目指す究極の境地である。

「教育者」型人格における修養と宗教信念(松本)

「勤労を厭わぬこと」「規律を重んずること」は、共に作務・清規の実践として、禅の叢林で古くから重んぜられてきた。この身体で行ずることを、三好は教育の一環として重視したのである。

「師弟の情誼を重んずる」ことも、師資相承の修行の世界では、厳しさの中にも温情の通った実践道として大切にされてきた。師弟とは、本来何のつながりもなかった者同士が学業授受の縁によって結ばれたタテの人間関係である。学道というところが、しばしば「師の行履を慕いゆくことだ」と言われるように、先人・後人のこの関係に情誼が大切なことは、古今東西を通じて変りはない。

三好がとくにこのような具体的説明を付したのではないが、このように見ると東華女学校において、彼はおのずと仏教的・禅的内容に通ずる修養講話を行っていたことが判る。

これは一端に過ぎない。しかし三好は頼まれれば到るところで講演を行っている。彼の話は学術専門にわたることは殆んどなく、時に応じ場に随って懇切平易な語り口でのべられるが、帰着するところは修養の問題である。

そうした中で最も注目されるのは、第二高等学校における道交会での活動であろう。

道交会については『第二高等学校史』所収の「道交寮史」が詳しい。

道交会の創立は明治三十年である。設立の趣旨書に「：仏教ヲ以テ安心立脚ノ地トシ、道ヲ修メ行ヲ直クセムト欲スルノ士、冀クハ来リ合シテ仏陀ノ法蔵ヲ啓ケ⁽⁵¹⁾」とあるように、仏法求道の士を集め切磋琢磨するにあった。

発起人は数名の学生有志から成る仏教グループであったが、道交会の命名は当時の校長沢柳政太郎（一八六五—一九二七）で、彼は会の推進にも尽力した。発会式は大内青巒を招いて同年十月十七日、東二番町の曹洞宗支局で開かれたが、当初の会員は百数十名ほどで、中には仙台高等工業学校や医学専門学校生も混っていた。

日清戦争後の青年層の間に、宗教的覚醒が高まりつつあった時代であったから、仏教に関心を抱く学生も少くはなかった。道交会は校内の有力団体であったと言う。

行事は月例の仏教講演会や仏教行事（降誕会や涅槃会など）に因んだ公開講演会、隔週毎の仏典講座などが主要なものである。

仏典講座では、『大乘起信論』や『天台四教儀』、『般若心経』などが読まれたという。

三好が二高に赴任してきたのは、道交会発足の翌々年、明治三十二年である。その翌年十二月には、事業の一つとして自治の道交寮が東七番丁へ移転した道交会事務所内に開設された。十数名の寮生が入ったという。

以上は『第二高等学校史』による概略であるが、この道交会において、三好が積極的に活動するのは、第四代校長中川元と組んだ教頭時代である。

中川校長は校務を殆んど教頭に一任していた。その上道交会は、仏教信仰を前提とした学生有志の修養と親睦の団体であったから、三好の趣好に充分叶ったものであった。三好は同僚の杉谷泰山教授と共に、会の運営に積極的に尽力した。

当時、道交会は仙台市内の仏教団体と組んで、積尊降誕会の祝賀行事を盛大に開催していた。主体はむろん学生ではあったけれども、三好もまたこれに進んで参加協力した。

明治三十五年の降誕会は市内の仙台座を借り切って行なわれ、記念講演や各種余興もあって、参会者二千余という盛況を伝えている⁽⁵²⁾。

この日、講師として招かれたのは、村上専精であった。村上は三好から丁重な送迎や旅館への訪問を受けたことを回想して、いかに彼がこの会の運営に気を遣っていたかと推察し、その折、道交会の有様を見て「各高等学校仏教会中、最も隆盛のものならん」と記している⁽⁵³⁾。

また道交会の招きにより三・四回仙台を訪れた前田慧雲も「その度毎に同君（註三好）は常に深切に万事に斡旋の勞を執られたのみならず、日夜茶を啜り乍ら信仰談や修養談を交換した」と語っている⁽⁵⁴⁾。

明治四十年頃の降誕会に村上と共に招聘された古川確悟は、仙台座での講演会で三好自身が、「迷信果して非か」との題で演説したことを伝えている。⁽⁵⁵⁾その折も又、多くの参会者を得て盛会をきわめた。

涅槃会の行事は、毎会百余名の参加を得て、道交会事務所で行なわれた。他方、仏像が寄進されるなど道交寮も整備され、寮内での仏行も盛んに行なわれた。更に後年ではあるが、三好は大太鼓を寄贈し、勇壮な大雷が道交寮の名物となった。明治三十年代半ばから後半にかけての道交会活動は最盛期と言われたのである。

三好が傅育官長に就任して仙台を去った後も、彼は自宅や官邸に在京の旧会員を集め、東京道交会の名のもとに、仏教講話の機会等を設けた。大正六年秋から毎月の第一、第三金曜日夜開催された。「修養は一生」という信念に基づいたものである。⁽⁵⁶⁾

道交会も道交寮も、大正・昭和と時代の変遷と共に推移し、二高廃校（一九五〇）と共に消滅するが、三好にとって最も力を傾けた宗教的活動の場であったことは間違いない。

しかし三好が二高において、宗教的信念に基づき青年を教えようとしたのは道交会のみではない。官立高等学校教師という公人の立場において講じた彼の「倫理」の授業も、きわめて宗教的（実践的修養の）傾向をもっていた。

「教育者」型人格における修養と宗教信念（松本）

彼は授業開始前、短時間ではあるが学生に対し、姿勢を正しての瞑目黙念の行を課した。この黙念の行と修身の訓話とは、全学生という立場からは必ずしも受けは良くなかったようだ。

この瞑想の行は、三好の坐禅体験を基調にするものであり、合理的知性の教育を受けた一般学生にとって異和感の生じるのは避けがたかったところであろう。しかし他面、東洋的超俗の風貌をもった三好の人柄とその講話を、卒業後も忘れがたいとする声も少くない。

しかし、こうした修養としての宗教を説いた三好は、周囲からどのように見られていたろうか。

二高教授・阿戸田令造は長く三好に仕えたのち、第九代の同校校長になった人物である。必ずしも三好に忠実な部下ではなかったと自認しているが、道交会の伝統を維持し、大正期における復興や昭和期での財団法人化に尽力した。道交寮の戦災後は、自宅を開放して『歎異抄』を講じた。阿戸田は三好の生き方を冷静に見守りながら、その精神の受け継ぐべきところは受け継いで、道交会の灯を護持した人物である。

その阿戸田が、三好を評して大要次のように述べている。先生は教授にも生徒にも一桁違う実感を与える教育者であった。理想家であり、理想家としての気合いは、実に修養の結果から生じたものであり、先生こそは「修養の人」「理想

を追う人」である。そしてその修養は、神儒仏ときにはキリスト教をも併せた「外観巨流細川を朝宗せしむる大海の如きもの」である。しかし、先生の「直往邁進不覇縦横の生き方」の帰着するところ、必ずや矛盾や破綻を免れがたい。究極的には、この矛盾が克服されるべきだったが、その前に死が訪れたことは残念である。三好の教育施設には煩悶の跡があり、矛盾の痕跡が残っていると⁽⁵⁷⁾言う。

この指摘が妥当か否か、軽々には速断できない。しかし、三好には、いわゆる煩悶は無かったのであろうか。ここに彼の「安心」の問題が問われることになる。

安心としての宗教

明治二十年代後半から三十年代半ばにかけて、わが国の一部青年の間にいわれる「自我の煩悶」ということが流行した。明治における二つの大戦のはざまに咲いた「あだ花」のごとき現象であったが、自我の主張とその挫折に傷ついた若い精神の煩悶は、疾風怒濤のごとく青年の心を捉えた。

その例を三好の身辺に求めれば、同じく二高教授であり彼と同世代である高山林次郎（樗牛前出）がいる。その高山の周辺には彼のライバルと自認していた稲門の綱島栄一郎（梁川一八七三—一九〇七）もいた。彼らの遺著をみれば、いかにパーソナルな宗教を求めて苦しんでいたかがわかる。⁽⁵⁸⁾更に象徴的例としては明治三十六年投身した藤村操（一八八六一

一九〇三）の死がある。

藤村の死は、実際は空虚なものであったが、当時のジャーナリズムから新思想勃興期の哲学青年の死として騒がれた。しかし、これらについて鉄本位の鍛練主義、積極的向上の修養を説いた三好は、殆んど一顧も与えていない。

かえって三好は「懷疑及偽善の弁」の中で懷疑にふれ、諸学は「疑う」ということから出発するが、人間の生きる実践道徳にまで懷疑を及すことは全く無益なことだとし、人生は疑うより肯定して、積極的開発に努力すべきことを強調して⁽⁵⁹⁾いる。ここには煩悶の入るべき余地はないとも言える。

明治二十年半ばを騒がせた教育勅語の国体主義とキリスト教の世界主義との対立は、三十年代後半にはおほむね国家体制の中に吸収され鎮静化されていたが、三好においてはなおこの問題が強い関心事であり、明治四十五年「宗教監督の必要」を文部・内務両省に具申している。⁽⁶⁰⁾このことは、三好が内心の煩悶より眼をより外的な国事の問題に注いでいる証拠でもある。

それでは三好に全く煩悶と言うべきものはないのであろうか。哲学科出身者として、内省的世界への沈潜から生じる自己への懷疑はなかったのであろうか。阿戸田は、三好がそれを未解決のままに残したと言い、そこに矛盾と煩悶の痕跡を指摘したが、筆者もまた彼の人格の特殊性として、突出しよ

うとする積極主義と自制する艷消し主義との二方向のあることを先に述べた。

人は誰でもそうであるが、三好も又決して矛盾皆無の完全人格ではない。むしろ矛盾多き人間であった。職業教師の規格にはまった人間ではなく、型やぶりの人間教育者、異色の教育者であった。そこに三好の人間の魅力があったとも言える。三好に悩みのなかるうはずはないと思う。

明治三十六年十月三十日の道交会の席上、三好は宗教心の發揮には経験の重ねられることが大切だと強調し、その上で自らの問題として「予、自身の経験(筆者註 宗教経験)、初めは煩悶より入り入り。二十三才のとき禪を修せり。第二の煩悶、修すること三年漸次得る処ありたり。自力安心にして未だ有難き仏を知らざりき。後、他力宗を見て漸く両者の一致を図り、心中難有味を感じるようになれり。十数年間の長き経験によれり」と述べている。⁽⁶¹⁾

これによると、三好の宗教経験はまず煩悶から始まったとある。しかしそれ以前彼には、幼児体験としての寺詣りがあった。三好は祖母に連れられてよく菩提寺光徳寺(浄土宗)に墓参したという。むろんどれほど自覚的であったか不明であるが、この幼児体験の痕跡は考慮に入れなければならぬ。

「煩悶より入り入り」との煩悶とは何であろうか。この頃の

「教育者」型人格における修養と宗教信念(松本)

三好には、病患・失恋・失職といったものではなく、煩悶の内容を明らかにする具体的資料に乏しいが、二十三才の時といえば、この年七月第一高等中学校を卒業、翌八月金沢医学校に勤めていた父義雄(四十七才)の死がある。高等中学卒業と大学入学のはさまの期間における父の急逝、これに伴うさまざまな問題が彼を悩ませたのではなかるうか。この点については、親族の近藤銃太郎が三好家の家庭事情を語っている。⁽⁶²⁾ 家督のこと、放蕩の兄のこと、家計のこと、学業継続の前途のこと……父の死は一挙にこうした問題を噴出させた。

「禪を修せり」の語に対応するのは、翌二十六年四月、北条時敬の紹介を得て、清見寺の坂上真浄の鉗槌を受けたことである。

「第二の煩悶」が到来すとあるけれども、これもまた内容も時期も特定することができない。

ただ二十代後半から三十代前半にかけて、三好に内省的自覚を促すような時期が二つあったと思われる。

一つは直情径行な理想主義が災いして、真宗大学、新発田中学、長野中学等を短期間で辞任せざるを得なかったことを反省したと思われる明治三十一・二年(二十九・三十才)の頃である。⁽⁶³⁾

もう一つは、全三十五年、二女春江(一才)と母とよ(六十才)を失った三十三才の悲しみの時である。

むろん職域での人間関係の不調と肉親の死が、どのように絡みあって煩悶という形式になるのか明らかではない。或いは全く別な要因であるかもしれない。

しかし、たとえ何であれ三好に第二の煩悶と自覚させるものがあって、これも又自力の修養によって峠を越す見通しが立ってきたということである。

この間にはすでに挙げたように多くの禅匠とも出逢い、著名な仏教学者との交流も深まっている。幼児体験からの延長である浄土宗の檀徒という立場と平行させながら、一応、自力の修養人を自任し、そのためには修養を厳しく自らに課し、同時にそれをまた人に説いたのである。

しかし、それでいて有難い仏さまが掴めなかったと洩らししている。

「自力安心にして未だ有難き仏を知らざりき」とは、とりよりに依っては色々に考えられる。その自力安心が、実は不徹底なるがためという言い方が一つある。そこには、徹底されれば有難き仏と出逢うこともできるという裏がある。

しかし三好の場合は、すぐ次に「他力宗を見て云々……」とあるように、自力宗に限界を見ていると言ってよい。

北条時敬と三好とを安易に比較はできないが、北条ならば恐らく前者に属すると思われる。

北条も三好も共に修養ということは常に強調していた。し

かし北条の禅は、単に修養のための禅ではなかった。かつて人に問われたとき、禅をやるなら「脇腹に刃を刺し込む勇氣があるならやれ」と答えたことがある⁽⁶⁴⁾。

このことは、三好の禅が真剣でないと言うことではない。三好には、北条にはないところの、修養のためにはあらゆるものを取りこむシンクレンジムが基調になっていると言うことである。これが三好の三好たるユニークさである。北条には北条の個性のあるところが良い。

事例研究は事例間の比較が大切であるが、それによって相互の優劣をつける価値判断はさけねばならない。それぞれの個の事例において、宗教が如何なる意味と働きをもっているかが解明されれば可とする。しかしそのために事例相互間の個別性・相似性が明らかにされることが必要である。

このようにみると、三好が自力宗に限界を見、他力の立場になって始めて有難い仏が見えてきたということは、三好自身に即して考えなければならぬ。

三好と他力信仰⇨浄土門との繋りほどのように始まったのであろうか。

その第一は、先述したように祖母に連れられてお詣りした浄土宗光徳寺との関係である。常照山光徳寺は旧藩公内藤家ゆかりの菩提寺で、墓地は大名・家族とそれぞれ上下段に分れて約六十基ほどある。

三好家のような一般藩士の墓は、別に市内羽黒町宝光寺（曹洞宗）に隣接する共有墓地にある。旧士族の多くは藩公の菩提寺の檀徒として法要儀礼は光徳寺、埋葬納骨は宝光寺側の墓地と割り切っている。三好家でも大正四年の兄銀太郎の葬は、浄土宗光徳寺で営み、曹洞宗宝光寺の光瑩の側に葬った。「葬」という日本仏教特有の、しかも寺・檀を繋ぐきずなどとしては基本的な形で、まづ三好は浄土宗光徳寺とつながっている。

ところで自力から他力へ転じて、有難い仏を感得したということは、個の次元での転回がなくてはならない。

しかし三好には、明白な回心の節目が見当たらないのである。むしろ回心には、漸進型のものもある。しかし三好の場合、それとも異なる。彼は自力・他力の両眼を具えている。自力か他力かではない。自力から他力へでもない。自力でも他力でもない。自力と他力を具有しているのである。或いは、自・他両方が互いに補完し合って、一つと言うこともできる。一眼で自・他両方の働きを言うこともできよう。

このことは、すでに三好の言葉で明らかである。彼は「自力安心にして未だ有難き仏を知らざりき。後、他力宗を見て漸く両者の一致を図り、心中難有味を感ずるようになれり」（傍点筆者）と言ったのである。

これは自力・他力の両者一致である。自力を捨てて他力になったのでなく、自力も他力も無くなった自他一如のところ、**「心中難有味を感ずるようになった。」**それまでに十数年間の長きを要したというのである。

この自・他力一如の境地も、自力一本の積極主義からの回心だと言えるかもしれない。十数年間という数字も、文字通りに受けとめてよいものか。若し良いとすれば、二十四才の参禅時から計算しておよその時期を推定することができる。しかしドラスティックな変化でない限りそれを確めることは難しい。しかし、こうした「十数年」という歳月を通して、三好に影響を与えた要因は何であろうか。

よく挙げられるものとして、真宗大谷派の影響がある。大卒卒業後直ちに赴任した京都の真宗大学及び全中学の教員時代、清沢満之らの教学刷新運動の渦中に入り、激動する真宗教団の実態を通して、真宗教学のあり方にふれたことである。とくに清沢やその周囲に集った真摯な人々から得たものは少くなかったと思う。

清沢没後しばらくした大正三年、北海道を視察旅行中の三好は、札幌市中で臘扇会の小宴に出席「清沢満之師の往時を談じて十時過ぎ帰宿す」と記している。⁽⁶⁵⁾白河党運動の盛んな時代、京都に赴任した三好は二十七才、失うものよりも得ることの多かった活動期である。

京都在任期間は短かったが、こうしたことを縁として三好は、近角常観をはじめ真宗関係の僧や学者を知己にもった。

次にあげられるのは、当時浄土宗の高僧といわれた山崎弁栄との相見である。大正七年三月芝増上寺山内の一室で一時間余ほどの会談である。会談後の感想として、三好は「浄土門では上人の如き大徳には初めて御目にかかった。今日は久々で先に森田禅師から御話を承った時と同じ気分がして誠に有難かった」と随行した渡辺庄輔に洩らしたと云う⁽⁶⁶⁾。

当時山崎弁栄は如来光明主義を唱えて布教活動に専心していた。

ただ留意しておくべきことは、右の相見が行なわれたのは大正七年、三好は四十九才で、五十才で没する僅か前年と言うことである。

先の清沢満之との出逢いは、明治三十年であるから、その間に十九年の開きがある。むろんこの間にも、いろいろな浄土教思想や他力門の教えに触れる機会があったにちがいないとしても、清沢と山崎に代弁されるような他力門との機縁で、三好の自・他一体のいわば複眼的単眼の視座が説明されるだろうか。とくに、その間十九年の長いインターバルがあることを思うと、潜在的にせよその間をつなぐ何かがあると思われる。

三好家と菩提寺浄土宗光徳寺との関係は先に述べた。三好

の生家の墓所（宝光寺側の共有墓地）をみると、先年調査の折では石塔四基を確認した。その中一基は愛吉の子で独身のまゝ死んだ兄の後を継いだ道丸のもの、他の一基は明治四年辛未の年号は入っているが苔むして文字は判読できがたい。残りの二基は三好の父と兄のものである。他に彼の母の墓石があるはずだと思いが、識別できなかった。

『伝記』に「為展墓帰郷之記」と題するやや長文の紀行文がある。

それによると大正三年八月、三好は亡父の二十三回忌、亡母の十三回忌、亡兄の十三回忌の供養を思い立ち、帰郷墓参のため一日仙台を発っている。十六才の長男忠一の外同行者二人。殊更道を庄内にとり遠路迂廻して郷里に入ったのは忠一に旅の辛酸を体験させようとする為めという。この間、川渡まで列車を利用したところもあるが大半を歩き、難儀の上、五日夕村上に着いた。

法要当日のことは、三好の日記から引用したい。

八月六日。快晴午前八時忠一召連れ藤井順之、同順泰両氏同伴墓参す（註宝光寺共有墓地）。是より先藤井氏好意を以て墓所を修理せられ境界に石を敷き、墓石の傾けるを直し面目頗る革まる。感謝何ぞ堪へん。了て三宅先生（註快齋）…中略…の墓を詣づ。光徳寺に於て午前十一時より白根上人導師となりて法要を営む。観無量寿経の読誦あり。

終りて陪僧並に藤井氏を招じて齋を振舞ふ。中条より渡辺庄輔来り法要に列す。仙台より飯渕氏所託の觀世音像を携帶したるを以て是に於て渡辺に渡す。午後二時より各宗協會の催にかかる仏教演説会に臨む⁽⁵⁷⁾略

要点記述の簡潔な文章である。この時三好は四十五才。故郷を離れて以来、劇務のため墓参で帰郷することは殆んどできなかつた。

「為展墓帰郷之記」の冒頭には、明治十八年三好が出郷したときが十六才。今長男忠一が正に十六才に達し、墓参の旅に随行することを思い、改めて三十年前の往時を追懐している。そしてその思いは自ずと亡父母に転じ

「更に三十年の修行を積み稍志を成して庶幾くば亡父母在天の靈を慰むることを得ん哉」の文字を残している。

法要当日の文章も簡潔ではあるが、觀無量寿經の読經にあらずかり、陪僧や列席者に齋を供養し、いかにも満ち足りた和やかな気分が感ぜられる。

三好の家庭は祖母・父母共に仏事を篤く行じてきた。彼は、この後郷党の人々から歓待され、また近隣各地の婦人会や青年会に招かれては仏教講話をし、久しぶりに故郷の人々との交流を深めた。

そうした中で牛山婦人会十周年記念会（於光徳寺）の講演

「教育者」型人格における修養と宗教信念（松本）

覚え書とも思えるものに、「——念仏易行門の婦人に適切なること。教外別伝不立文字は浄土門にも通ずること」の断片的文字がある⁽⁶⁸⁾。

この片言では正確な内容は理解しがたい。しかし大事なことは、三好の聴衆の多くに、真宗王国と言われるこの地方の念仏信者の婦人たちがいるということである。そして更に重要なことは、三好がすでそうしたことへの配慮をしているということである。右の断片的文字は、その事実を示している。

三好自身は自力の鍛練主義修養を通してきた。しかし、泉下に眠る父も母も兄も、夭折した彼の娘も、すべて故山で念仏の供養を受けている。それによって浄土に往生しているのである。

こうした理屈を抜きにした大地的事実を、三好は素直に受けとめている。日記が示す光徳寺での法要の心境がその表われだと思える。

三好が「漸く両者（自力・他力）の一致を図り、心中難有味を感ずるようになれり」となる迄に、こうした力が働いていたと思う。

五 教育と宗教

大正二年（一九一三）、大谷大学尋源会編『宗教と教育に

関する学説及実際』（本文三二二頁、無我山房発行）と言
一書がある。⁽⁶⁹⁾

尋源会々長大谷瑩亮の序文があり、この書は「…靈性の慰
安と活力を要望する一般社会の氣運に應えるべく」現下の急
務として、大谷大学新校舎落成を記念し企画されたと言う。

たしかに大正二年は、明治が総括されたばかりであり、前
帝の大葬と乃木夫妻の殉死をもって、大逆事件の判決と刑執
行に象徴される暗い明治四〇年代は幕引きになった感はある
けれども、石川啄木が『時代閉塞の現状』を訴えたのは僅か
三年前であり、東京市電ストライキが行なわれたのは二年前
にすぎない。そればかりか護憲運動や労働争議は、大正の幕
あけと共に益々盛んとなった。

これに対し精神界を指導する理念は、未だ摸索の域を出な
かった。

したがってこの書の執筆陣には、当時各界の指導者と見ら
れる当代の錚々たる顔ぶれが集められた。

京都大学総長	澤柳政太郎
早稲田大学総長	高田 早苗
東京音楽学校長	湯原 元一
文学博士	吉田 熊次
全	村上 専精
第二高等学校長	三好 愛吉

文学博士	遠藤 隆吉
法学博士	浮田 和民
文学士	相原一郎介
文学博士	三宅雄次郎
京都大学講師	米田庄太郎
文学博士	加藤 弘之
法学博士	樋口 秀雄
文学士	大島 正徳
文学士	松村 介石
「道」主筆	前田 慧雲
文学博士	谷本 富
文学博士	高楠順次郎
全	新渡部稻造
農学博士	加藤 末吉
法学博士	岡田 良平
東京高師 附属小主事	成瀬 仁蔵
前京都帝国大学総長	松本文三郎
日本女子大学々長	佐々木 明
文学博士	南条 文雄
大谷大学教授	
文学博士	

これらの顔ぶれを見ても当代一流と見られた教育者、仏教

学者、キリスト教系学者、文明批評家を揃えている。

三好もこの中の一人であるが、丁度この年の八月、彼は岩手県海岸部を講演旅行をしている。同県高田町で行なった講演はきわめて通俗的なものであった。

その中で三好は、西洋文明の流入は急速に社会を発展させたが、同時に分析的思考を発達させ世の中が複雑化し、国民の統一が困難となり「寒心に堪えない」と述べている。

ここには国民国家統一を至上とする体制内教育者という三好の限界がある。

そこで示された政（政治・教育・宗教）・教（学校・家庭・社会）・道（神道・儒道・仏道）の三者が大同団結して一貫しなければ、国民の大同団結は不可能とする主張も余りに保守伝統的で粗雑である。

しかし、ここで大事なものは、三好が「寒心に堪えない」と時代の趨勢に不安と危惧を抱いていることである。

この不安の上に三好は「教育と宗教との関係について」と題する二十三頁の小論を、尋源会編の刑行本に執筆した。

この中で三好は、教育と宗教とは人間生活と社会の実際から見て全く同一だと断言する。教育と宗教の分離説に対し両者は相互関係しあうのではなく、その内容と精神において「不二一体」とみている。ここには教育と宗教の関係を学理的に分別しうる哲学科出身の彼が、理論家よりも実践者、教

育学者よりも教育者、更に言えば宗教的実践を背骨とする特異な教育者であることを物語っている。

その彼は教育の最終目的を、端的に「唯一感化にあり」と明言する。

したがって単なる知識や技術の機械的伝授には「教育」はないとみる。真の教育は制度や方法・種類などの形式的完備から来るのではなく、また学問・才智・意志・徳望なども単純に感化の要素とはなりえないとする。感化の要素とは「徹底した人である」と信じている。

徹底とは正に人格修養の徹底であって、三好の教育観の基調である開発主義と関連して用いられた全力主義、活発主義、鍛練主義、鉄本位主義等の人生観と無関係ではない。

しかしそこには禅の体験による信念的裏打ちがある。禅体験のある三好にとって、宗教的に最も尚ぶべきものも「唯一の徹底」であった。

禅の徹底は無我という我や悟りという自覚がある限り不徹底とする立場から「教育だの教授だの訓練だの陶冶だの、乃至教育事務等に拘泥して、自ら教育の外に超然たることのできぬものにとっては、徹底など夢にも了解されない」と言っている。

「自分ながら未徹底のくせに大言壮語のようで甚だ心苦しむが、近年益々深く此事を信ずるようになってきたのでかく

断言することを憚らない」とも言っている。

ここには教育者人格と宗教的人格が、修養の徹底において基盤を一つにしている。目的と方法は異なっても、人を感化することでは教育と宗教は基本的に同じである。この点ヲ三好は強調した。

非合理的体験主義に立つこの考え方は、教育者として極めて異様であるが、学習効果を第一とする合理主義教育への批判警告を含むとも解されよう。

三好の晩年は皇子傅育官長という教育者としての栄誉をきわめた。そうしたところへ繋がってゆく教育官僚の保守的体質を否定することはできないが、三好にとってはそれがすべてではない。むしろ、そうした枠や規制からはみ出たところも少なくない。不覇縦横な野ごころの人、雄大剛健を標榜した物外三好愛吉として慕われたのは、この人格像であった。

大谷瑩亮が「靈性の慰安と活力を求む」と述べた今世紀初頭において、単にその保守伝統的価値観に立った人間像の一面のみで捉えるだけでは問題が残ると思う。

註

- (1) 新潟県立新発田高校校庭には三好愛吉のブロンズ胸像がある。同校『創立五十周年記念特輯号』（一九四七・二・二五）には「卓越せる教育者三好愛吉先生」（山内雄太郎）、「三好愛吉先生」（大杉栄）等をのせている。『七十周年』『八十周年』

- (2) 周年『九十周年』各記念号にも同様企画があり。長野高等学校には三好に因んだ「神聖なピアノ」の伝承あり。その他『第二高等学校史』など。
- (3) 平成四年十二月十二日大正大学における「第一回日本仏教教育学会」一部会にて口述発表。なお同発表の一部は本稿にも収録。三好の小論『宗教と教育に関する学説及実際』に所収、六九―八〇頁。大谷大学尋源会編、一九一三。
- (4) 『物外三好愛吉先生』三好愛吉先生弔慰会発行、一九三一、非売品。以下『伝記』
- (5) 同資料蒐集と調査には、東北大学文学部樋口知志氏、村上市瀬波の吉田牧夫氏、旧二高卒業生落合和夫氏の教示あり。
- (6) 拙稿「宗教的人間像の比較的考察」（宗教研究一八〇号所収）全「人間と宗教―独歩・上」同じく「人間と宗教―独歩・下」（駒大宗教学論集）四・五号。
- (7) 加藤太一郎「村上における文明開化の瞥見」一七一頁、（村上市史編纂資料第三号、一九八七）所収。
- (8) 『伝記』七頁。内藤子爵家々職木村栄之輔の文
- (9) 『藩士一覽表』（村上郷土史）一九三一所収）一三八―一四〇頁
- (10) 「新潟新聞」明治十年十一月二日、但し金禄公債証書の発行開始は明治十一年。
- (11) 明治二四年にも同様問題が村上私学校（村上支校の後身）の経営をめぐるって発生し同校の廃止論に迄発展した。三好はこれに対し反対論を唱えた。村上史編纂資料第二号一九八六、一三六頁
- (12) 『伝記』後篇七頁以下
- (13) 全前 九頁
- (14) 全前 前篇二―一頁、篠田家は旧膳所藩の藩士、当時は東京で印刷業を営む。三好は在京中寄宿、経済的に援助をうけた。『伝記』前篇十三頁。

- (15) Samuel Smiles (1812~1904) : Self Help 1859
『自助論』が日本人の自立志向に与えた影響については藤原
暹『日本における庶民的自立論の形成と展開』ぺりかん社、
一九八六。
- (16) 『岩船月報』四三号、大正三年十一月二十日刊(村上市教育
委員会蔵)。
- (17) 『伝記』前篇二十頁
- (18) 三宅快齋(一八四二—一九〇四)。天保十三年村上に生まれ
る。村上藩士半兵衛の二男。江戸にて晩年の佐藤一斎の門に
入る。帰国後、克從館の教官。村上小学校、村上学校に教え
る。のち新潟師範学校、新発田中学校、長野師範学校教諭。
詩文をよくし、三好は終生師として仕えた。村上小学校前庭
に豊碑がある『村上郷土史』三三二頁以下。
- (19) 島田重礼(一八三八—一八九八)。儒者。篁村と号す、昌平黌
に学ぶ。村上藩に招かれ百石。明治十四年、帝国大学文科大
学教授。文学博士。東京学士院会員。岩船郡郷友会等を通し
て三好と接触の機会があった。
- (20) 『伝記』前篇二六頁
- (21) 全前
- (22) 全前 // 三五頁
- (23) 加藤太一郎 前一八一頁
- (24) 『岩船郡郷友会誌』第一号九頁
以下、各号共に村上教育委員会所蔵資料。
- (25) 『新潟県教育百年史』(明治篇一、新潟県教育委員会編)一
九七〇、八一—頁
- (26) 『廊堂片影』西田幾多郎編、日本教育会一九三一、二八二頁
『駒沢大学仏教学部論集』第九号、一九七八・七四頁—九一
頁。
- (27) 『伝記』後篇二二頁
- (28) 『駒沢大学仏教学部論集』第二十二号一九九一、七二頁以下
- (29) 『今北洪川』鈴木大拙、禅選集十卷、所収、春秋社、一九七
五、八八頁。
- (30) 『円覚寺史』春秋社、一九六四、六〇—頁以下。
- (31) 北条も第四高等学校、山口高等学校、広島高等師範学校の各
長。学習院長、東北大学総長等を歴任したが、北条と三好は
共に重厚な在野的風貌において共通する面がある。北条が金
沢遊説の伊藤博文に対し学生の風教上、柳暗花明の巷での遊
興を慎しむよう進言したことは有名であるが、同様なことを
三好も伊藤侯に對し行ったという説がある。その真偽は別と
して、両者の人柄の相似を思わせて興味ぶかい。
- (32) 『岩船郡郷友会雑誌』第六号、七三頁、明治二七年七月二十
日刊、二十一—二三頁。「大黒天考」一、大黒天命ハ大黒天ニ
非ズ。二、大黒天神ノ華弁。三、大黒天ト聖天尊トハ起源ヲ
一ニス。四、湿婆神ノ事、附、男根崇拜事、(未完)
- (33) 『伝記』前篇六八頁
- (34) 全前 後篇三一—三三頁
- (35) 全前 全 三一—三一—三四頁
- (36) 『大休悟由禅師広録』第三卷一三八頁。
- (37) 山内雄太郎(姫路高等学校長)によると三好を山崎弁栄にと
りもつたのは、星見天海の門下である無得居士渡辺庄輔であ
ると云う。渡辺は星見について参禅すると共に念仏門の山崎
弁栄にも帰依していた。三好は芝増上寺の山内で山崎弁栄と
逢い、念仏者として本当の人のようだと洩らした。『伝記』
前篇一四四頁。
- (38) 品川は当時政界の第一線から退いていた。しかし強引な選挙
干渉で民意の支持を失い、一般には信望の低い人物とされて
いたが、三好は善悪はいずれにせよ信念に基づいて断呼と行
う人格に魅かれたと思われる。
- (39) 『明治教育古典叢書』第三四卷。(国書刊行会)一九八一、
一八一頁。

ヘルバルト派の教育学説はエミール・ハウスクネヒトにより一八八七年もたらされ、明治二十年代には内面自由・完全・好意・正義・公平の理念が教育勅語発布後の徳育尊重の社会で観迎された。ヘルバルト派教育学は三十年代以後、社会的教育学説が抬頭するまで日本教育界の主流となった。

〔40〕『伝記』後篇五頁。「ほとんど毎夜祖母から昔噺や八犬伝、児雷也等の噺を聞きたるよう覚ゆ」とある。

〔41〕第二高等学校・尚志会の発足は明治二十六年。二高の創立は明治二十年。

〔42〕高橋左門「二高の校風と三好愛吉」第二高等学校創立九十周年記念史料展・パンフレット九頁。

〔43〕『第二高等学校史』一九七九、座談会（その一）一二一―四頁桂重鴻（大正四年卒）の談として明治四十五年入学式にて「雄大剛健」の語を三好校長の口より聞いたとの証言。これに對する野口明の（大正五年卒）同調あり。

〔44〕『伝記』前篇一四二頁
全 前 六二頁

〔46〕たとえば若林資蔵氏（『伝記』前篇五頁）。斉藤清太郎（全上、三四頁）、杉山泰山（全上一〇七頁）、白井成允（全二二二頁）、阿刀田令造（全二七七頁）など。

〔47〕『尚志会雑誌』七十二号（明治三十九年）五頁以下。

〔48〕『伝記』前篇一八〇頁

〔49〕全前 全 九八―九九頁

〔50〕全 後篇五〇―八頁

〔51〕『第二高等学校史』一〇九六頁以下に「道交寮史」概要あり。道交会と道交寮とは不可分の関係にありながら、たてまゝえとしては平行的な組織と言える。道交会員は必しも二高生には限定されていない。地元仏教団体などと組んで盛大な行事をやり多数の参加者を見たが、このような発展と同時に二高生の寮生に限られた道交寮との調和とが問題にもなった。

仏教主義にもとづく学生活動としてきわめて有意義であったが時代の変動と共に大きく変化せざるを得なかった。三好の時代はその最盛期であった。

〔52〕全前、一〇九七頁、明治四十二年の降誕会にも二千余人の会衆が集った。

〔53〕『伝記』前篇一二三頁
全 一二六頁

〔54〕古川は二高卒業生、陸軍教授。この日は村上專精・三好愛吉・古川が講演した。『伝記』後篇七四頁。

〔55〕三好が二高を辞して官内省に入り皇子（秩父宮・高松宮）傳育官長に就任するについては、三好と第一高等学校で同窓であった宮内次官河村金五郎の推挙があった。生涯教育者たることを決めていた三好はかなり考えた上で、決断したと云う。しかし仙台を離れる三好に対しては、二高生のみならず、教員の間からも批判めいた声があった。

〔56〕「：八百の蜂章（註・旧二高帽章）健児をば極めて無雑作にふり捨てて、宮仕をなされたときは、已みぬるかな、先生も亦名聞の人かと裏切られを感じつつ消魂したものであった」阿刀田令造『伝記』前篇一七五頁。

〔57〕全前

〔58〕拙稿「宗教的人像の比較的考察―満之・樗牛・梁川―」『宗教的研究』一八〇号

〔59〕『尚志会雑誌』七二号、明治三十九年一頁―五頁

〔60〕『伝記』後篇六九四頁。トルストイ主義者の非戦論、クエーカー信徒の兵役拒否事件、セヴンスデー信者の土曜勤務の抗命事件等を問題視し、基督教並同教主義の学校取締について研究の要ありとする。三好の保守的宗教観がうかがわれる。

〔61〕『伝記』後篇二八二頁

〔62〕『伝記』前篇二四一頁。三好の兄銀太郎は放浪生活で身を崩し、独身であったので、分家した三好を父は後継者と考えて

いた。それが叶わぬ裡に父が死亡、兄の放浪で借財もあり、未解決な問題が山積していた。

- (63) 真宗大学在職中は、白河党改革派学生を支援し、宗務当局と対立す。

新発田中学校校長職は、郡当局と意見合わず、辞任す。

- (64) 『廓堂片影』

- (65) 『伝記』後篇八三頁紀行（大正三年五月十三日）。

- (66) 全前 前篇一三八頁

- (67) 「為展墓婦郷之記」大正三年八月六日条、『伝記』後篇九八頁

- (68) 全 大正三年八月七日条全前一〇〇頁

- (69) 『宗教と教育に関する学説と実際』一九一三、尋源会、六九―八〇頁

※三好愛吉、物外と号す

大正八年二月悪性の流行性感冒に肺炎を併発、東京大学附属病院入院、病勢あらたまり二月十一日午後八時半、永眠す、末期に際して、生の不滅を語ったと伝えられる。その病症経過については担当医福島東作博士の詳細な記録あり（『伝記』末尾十一―十七頁）。行年五十才。

郷里、村上市宝光寺共同墓地に埋骨

敬徳院殿仁誉至道慈愛居士